

- ◎車で出発してすぐ、「あ ICレコーダー 忘れた あちゃあ」である。今回の山、変更が2回あり、10日ぐらい前の天気予報、秋雨前線やら台風来週やらで傘マークが取れずこれは中止だと確信していたが、3,4日ぐらいに晴れマークが現れてきた、「ひょっとしたら・・・」という感じになってきた。二日前に三日間の予定の一日目をやめ、二日間にして行きましょうということになった。当初は、白山麓の市ノ瀬野営場でテント2泊、中の一日で赤兎山を一周しようという予定、一周8時間ぐらいのコースだった。二日間になったので、「取立山避難小屋一泊 翌日 赤兎山 帰阪」というコースに変更になった。
- ◎大阪を8時に出発、3連休のなか日、しかも昨日までは集中豪雨の翌日、キラキラ太陽が出ているが道路はいささか渋滞気味、しかも北陸自動車道は工事中の一車線部分が5か所ほどあった。昼飯を喰いたいけどこもかも満員、「ええい コンビニ弁当を 車の中で 喰おう」オレは“たらこスパゲティ”を温めてもらい喰った。車を進め2時に取立山駐車場に到着。コロナ前には“東山いこいの森”のキャビンに何度も泊まり、その都度着いた日に“取立山”を散歩して、翌日は赤兎山、経ヶ岳、荒島岳等を登っていた。
- ◎「昨日の 豪雨のあとの 谷筋は イヤだな」と思いつつ、「いやいや 水が要る」ということで時計回りに進んだ。4,5年前はほんの散歩コースが、ジジイになった今なかなかハードになってきている。水の流れる岩場は、5Mぐらいちょよっとよじ登って普通の登山道と思いついていたが、5Mぐらいが5回ぐらいあり、豊富な水量で靴が濡れる。慎重に一步ずつ登っていった。おおこれで平地だと思ったがまた渡渉がある。「この石は滑るのでは」なんて恐る恐るまた一步一步である。「水にはまりませんように」と進んで行く。
- ◎やっと尾根道に出て樹林帯を抜けた。まわりの山肌の樹々が色づいている。黄色、緑色、赤色、陽は出ているがぼやけた空気にそれぞれの色がパステルトーン、「黄色は レモンイエローじゃないと」なんて以前言っていたが、ライトもデープも褐色も交じりそれなりに山の景色になっている。赤もレッドから朱からエンジ色まで混ざっているがこれもまた景色だねえ。そこに常緑の緑色、三者三様の美しさ。
- ◎「こつぶり山を 超えれば 小屋だ」というピークに着いた。ここがこんな名前だとは知らなかったが、展望が素晴らしい。4時前の夕方、オレの影が身長の倍ぐらいの長さに伸び、坊主頭が先の方に左右している。白山がでっかくまる見え、10月下旬に行った“三ノ峰”も端っこに見える、まだ雪は無い。
- ◎小屋は何度か扉を開けてみたことがあるが泊まるのは初めてである。掃除をしていただいている間、東の斜面を登ってみた。帰って地図を調べると、この道は大長山に行く道だった。それだったらもうちょっと登ってみるべきだったなと反省。大長山まで3時間半のコースタイムだそう。
- ◎ビール、ワイン、ウイスキー、日本酒、焼酎、なんと出てくる出てくる。「まずは乾杯」ひろみさんの食担、これがすごい、いつも驚かされる。バケツ大の鍋、ドボドボ水を入れ、キムチを入れ、出汁を入れ、イカ、タコ、ホタテ、肉、サケ、もやし、野菜類、ぐつぐつ煮込んでさあ食べて。フライパンが出て餃子がある。翌朝はこの鍋に生ラーメンを入れ朝飯を食わせてもらった。
- ◎二日目7時10分前に小屋を出発。昨夜は9時頃に眠りについたが全く目覚めることもなく6時頃に起きた。昨夜の鍋に生ラーメンを入れいただいた。ひとり山と違い豪華美味の食事に舌鼓をうつ。6時くらいから明るくなってきた。湿った谷筋を登ると、尾根に出る、お陽さんが顔を出す、歩きながら空を見上げると小鳥の群れがビュンビュン、小さい割にすごいスピード感、霞んだ目の前のポコリンが目にも気持ちがいい。
- ◎8時過ぎに取立山駐車場に戻ってきた。二日前の大雨で土がヌルヌル何度か滑ってこけた。「次は 赤兎」
- ◎9:40 標高1150Mの赤兎駐車場を出発。それ行けやれ行け、峠までフーフー言いながら登っていった。赤兎山のてっぺんに立って、「さあ 遅くなるから帰ろう」と急ぎ下山した。大雨のあとの斜面がドロドロにぬかるみ、靴もズボンも泥だらけになった。駐車場で靴を水できれいに洗い靴底を見ると、「あれれ いつの間にかやら えらく減っている、これは 滑るね」である。これが最後の靴かと思っていたが、ちと考えねば。
- ◎男二人が交代で運転して帰ったが、何度も渋滞につかまり、大日で皆さんを降ろして家に帰ったのは9時35分。風呂に入り、おかずを食べ、ウイスキーハイボールを飲んだ。

従鎮西上人依観音助遁賊難待命語：16-21<ちんぜいより のぼるひと くわんおむの たすけによりて

ぞくのなんを のがれ いのちをたもつこと >

◎観音さまを大事にしていた女は、難を逃れ幸せになった、「仏を信じればいいことがある」という内容だが、この中に面白い話がいくつもある。栄達する女と、悲劇へと転落する夫、(30巻5：葦刈説話)と似ていると解説氏の弁。

◎30巻5：葦刈説話：貧しい夫婦がいた。何をしても上手くいかない夫は、「別れてみるか」妻もいやいやながら同意した。妻は〇〇家に使用人として入ったが、元々やさしい心の持ち主なので、妻を亡くした主人の妻となった。その主人は出世していった。女は難波の浦：大阪湾：で舟遊びをしていると、葦を刈っている男が目に入り、呼んでこさせた。哀れな姿の、元夫であった。隠れてみていた元妻は、元夫に食事をさせ着物を与えて帰らせた。ここで歌が出てくる 元妻と元夫の歌。

◎あしからじと おもひてこそは わかれしか などかなにはの うらにしもすむ
先々悪くならないと別れたのに、どうして、葦刈などして、難波に住んでいるの。

◎きみなくて あしかりけりと おもふには いとどなにはの うらぞみそうき
貴女がいないと駄目だと思ふにつけ、難波の浦に住みずらく思われる

◎今は昔、九州の〇国に住んでいた人が、京に上り、いろいろ仕事があったので数か月滞在しているうち、ひとり暮らしのさびしさを覚えてきたが、泊まっている家の隣の家の下女の口利きで、若く美しい宮仕え女を妻に迎えることになった。

それからは男はこの女をかたわら離さずかわいがっていたが、帰国しなければならぬ時になり、この女に、一緒に行こうというと、女は京に身寄りも知人もないので、かねがね、「誘う水あらば 誰かが誘ってくれたらいっしょに行こう」と思っていたから、男にこういわれて行くことにした。<中略>女を連れて故国に帰ってきたが、男はもともと裕福であったから何不自由なく暮らしているうちに、二、三年経った。

ところが男は隠しているものの、盗賊を生業とするもので、妻はいつしかそれを気取ってしまった。「知らぬ他国で何か大ごとでも起こらなければいいが」と思いはするが、男が自分をかたわら離さず愛しているので、そしらぬ顔をして過ごしていた。時には、「盗みをやめるように言ってみようか」と思いもしたが、一方、このような猛々しい男だから、恐ろしくもあってなかなか言い出せない。

在る夜更け、あたりが寝静まった時、共寝の床であれこれ語り、永く末を誓い合ったその折に、妻は、

「実は申し上げたいことがあるのです」

「どんなことでも聞かぬことなどあるものか たとえ死のうとも いやは決して言わぬ」

「ここ何年もの間おかしなことを見ておりますが それをおやめになって・・・」

これを聞くや男は顔色を変えて黙ってしまった。女はああいわでものこを言ってしまったと後悔したが・・・

その以後というもの男の態度ががらりと変わり、妻のそばに近づこうともしない。<中略>

そのうち四、五日ほどたって、男が妻に、「今日 この近くの温泉場に行こうと思うが どうだ」という。

女は、「さては今日私を殺そうとするのだろう」と悟りはしたものの・・・。

◎女は道中、沼のそばで、「殺されるぐらいなら 沼に身を投げ・・・」用を足したくなったといい、沼のそばで着物を脱ぎ沼に入った。女は沖に向かって沼をひと晩中這い続け、泥人形のようになっているので、人家らしきところで洗い流し裸で震えていると、老翁がやって来て家に連れて行き、老婆に着物を着せ、火で温め、食事を振る舞ってくれた。

- ◎今回の山は“蒜山縦走”である。とあるネットの書き込みに、「横の大山ばかり 登っていたが 初めて この縦走に 挑戦した 素晴らしい山なんだ」と書いてあった。オレも大山は何度か来たことがあるが、横の蒜山高原は小さい山なんだろうぐらいに思っていた。ネットで歩く人の風景を見て、「なんて 穏やかで 壮大じゃないのかな」と慌て飛びつき行こうと相談した。
- ◎夕方の3時、明日の出発地点登山口を見ておきたいと、キャンプ場に行く前にやって来た。下蒜山登山口：犬狹峠：いぬばさり：真庭市北部火葬場向かい：までやって来た。スマホのナビではすぐに出たが車のナビはなかなかこれらの地名が出てこない。「明るいうちに 来ておいてよかった 明日の朝 暗い 初めての道 迷うね」である。
- ◎蓼科高原は“ジャージー牛”で有名である。ジャージー牛、牛乳のための牛、ホルスタインに比べ体格が小さいので乳の量が少ない。味はいいらしく価格も高いそうだ。「ジャージー牛乳を飲みたいね」言っていたが売っているところもなく飲めなかった、「そのうち どこかで 試してみなければ」である。
- ◎キャンプ場に向かったが受付がなく、何度か電話して近くのホテルの受付に来てくれということであろうろした。夕方のキラキラ光り、明日登る蒜山の山なみが近くに見える、少し離れたところの大山が見える、紅葉のイチョウの黄色が、赤い葉が眩しい。
- ◎蒜山高原キャンプ場に到着。利用料金はひとり1500円ぐらいかな。この寒い季節の大きなキャンプ場だけど、すでにテントが10ハリほどある。ほとんどが大型テントで、我々のような山テントの人はいないようだ。車をサイトに横付けして荷を全部出し、テントを張っていく。5人のみなさんそれぞれ一人テントのスタイルである。まだ明るいうちにテントを張り、机、椅子を出し、コンロに火を点け湯を沸かす。大きな鍋が出て、出汁をぼとぼと、ホタテ、どんこ、魚の切り身、ネギ、エノキと入っていく。クーラーから冷えたビールを出して乾杯、次いでワインも出てきた。とはいえ明朝出発が早いので、山に登る前日は酒は控えてある。なんと焚火セットが出て、キャンプ場で買った薪に火を点ける。昔、澤山グループでよくやっていた焚火山行が懐かしい。
- ◎皆さん後期高齢のジジババ集団なれど、百名山が終わり、いまだに月に10回は山に行くとか、連泊で縦走を楽しんでいるとか、ツワモノぞろいである。「山は なにが面白いか」オレはかつて、「地面を 見ながら 歩くのが 好きだ」と言っていた。ほろ酔いの強者たちも、「山は どの山でもいい 歩いている自分がいるだけ」という。これは名言だ、言い得て妙である、「山を 歩く 自分がいる」である。
- ◎朝、5時ころ目覚めたがテントに雨が当たる音、まさかの雨である。標高500Mの蒜山高原の朝の温度は12度で寒くもなく快適である。ぐっすり眠れて体調はいいが、天気はどうかと調べると、まもなく雨がやんで、お陽さまマークが並んでいると安心した。湯を沸かしコーヒを飲んでパンを喰い、テルモスに湯を入れた。テントをたたむがずぶ濡れである。濡れたテントを袋に入れ車の中に押し込んだ。テントもシラフも帰って天日干しをしなければ。時間が押し7時頃に出発した。昨日下午見していたので登山口までの道筋は間違えることもなくスイスイ走れた。
- ◎登山口には車がすでに5台止まっている。この山は、ポコリンとしたピークが三つある。下蒜山・中蒜山・上蒜山の三つがあり、我々は下蒜山登山口から登って、中、上を通過して、上蒜山登山口までの縦走スタイルを計画している。コースタイムは7時間ちょっと。
- ◎7:30歩き始めた、最初は木道である、「先頭 行って」ということで前を歩き始めた。雨はやんでいるが全山曇り視界が悪い。「今日は 晴れの予定 だったが」そうぼやきながらも降られないのがましである。雨具のズボンをはいている、地面がドロドロ、前回の赤兎ほどではないが、靴もズボンも泥だらけである。
- ◎一本登ったぐらいから眺望が開け、目の前にでっかいポコリン、その手前に小さいポコリン、笹が生い茂った草原の中、登山道がくねくねついている。「あれは 下蒜山だ えんやこらだ」 風は冷たい、ものすごくいい景色、素晴らしいじゃないのかね。シャツを3枚重ねているがずっしり汗をかいている。

- ◎下蒜山に手前のポコリンで前の急登を見上げながら一本取った。「さあ あれを登ったら まず一つ目だ」「いい眺めだ」「ほんといい景色」「靴は ね 帰ったら 歩かせてくれて ありがとう と 感謝して 洗うのよ」水を飲みパンを喰った。今日は1.5リットル飲み物を持ってきた。ヌードル用湯は別で。
- ◎9:30 下蒜山。急登だと思っていたが右へ左へギザギザの道は意外と簡単ですぐに頂上に着いた。登山口から階段の連続、「きついな」とぼやきながら、それが終わって普通の道ながらまだまだ樹林帯、雲居平あたりから眺望が開けうつくしい景色。てっぺんはちょっとしたホワイトアウト、視界50Mもないかなとまるでまわりが見えなくなってきた。
- ◎せっかく上ってきたが、今度は泥んこ道をどんどん下る、ジオグラフィカによると下の鞍部まで300Mほど下って、また中蒜山まで300Mほど登り返す、どっこいしょ。樹林帯の中は葉を落とした枝ばかりの樹々、いくつかの樹が紅葉しているが、黄色も赤色も褐色がかっている、今年の紅葉は真夏が熱すぎ、評判が悪い。笹も茂っている。相変わらず視界が悪く100Mも見えないか、陽が照ってくれると、景色は良さそうと恨めしい。昨日下見で車を走っていた頃は山の上も見えていたので、一日早ければと残念である。鞍部はフングリ峠（たわ：たお：鞍部のこと）と読めない字である。
- ◎11:25 中蒜山のとっぺんにやって来た。相変わらず曇った空模様ながら、麓の牧場や建物やらが点在する村々は晴れて輝いている。雲がかかっているのは500Mより上の方だけかもしてない。ここで昼飯を食うことにした。カレーヌードルに湯を入れ、握り飯を2個喰い、麺をスープをすすった。横に避難小屋があり中を開けて見ると、囲炉裏が切っておりじゅうぶんに寝られそうだがここまで荷を揚げてくるには、今のオレはジジイ過ぎる、ここまで荷は上げられない。10年前まではザックは80リッターであった。
- ◎12:45 上蒜山のとっぺんにやって来た、さすがいささか疲れてきた。「ああ みなさん ここまで来てよかったね」「最高」「よかった」と歓声のあと、5人で記念写真を撮った。「ほんとの 頂上は ここじゃないよ あそこよ」なるほど地図にもそう書いてある、ここより往復20分ほど離れたところが10M標高の高い本当の上蒜山である。「行く?」「もういいや」「いや せっかく 来たのに」「それじゃ 行く」泥んこ道を進むと三角点があった、思った通り、なんてことの無い場所だった。「ぎゃああ」「え なに」「なにかが 横切った」「まだいるよ」見ると毛がハリネズミ風、ヌートリアの大きさ、寒さで動けないのか、「なにかな」
- ◎「この三角点は 二等かな 15センチ」なんておっしゃる。オレには、「?」であったが、調べてみた。明治時代に全国地図作成のため設置したことが始まり。一等三角点で日本列島の大枠を測量、二～四等三角点でさらに部分的に詰めていく。山の上にある石の一辺、18センチが一等、15センチが二・三等、13センチが四等だそうだ。国交省：国土地理院の管轄らしい。
- ◎1:15 上蒜山から上蒜山登山口に向かって下山開始。このころからお陽さんが見られるようになり、穏やかな暖かい山の斜面、横を見ると今まで歩いて来た中蒜山のポコリンが大きく見え、そのとっぺんに、「あれは避難小屋かな」というぐらいにはっきり見える。山肌の樹々が赤や黄色に輝き綺麗な景色である。
- ◎下山してタクシーでスタート地点まで行く予定で昨日から連絡してくれている。ネットで調べると1万円ぐらいと聞いていたが、山の上の物知りの方の情報では、5千円ぐらいよという話だった。6人の予定が5人になり、「5人詰めて乗ってください」とタクシー会社の弁。上蒜山から30分ほど下ったところで、「1時間ぐらいで下山するから」とタクシー会社に連絡した。上蒜山登山口の牧場のあたりで待ってくれという話。
- ◎2:30 上蒜山登山口に到着。7時半から2時半まで7時間の山行時間、なんとハイピッチなジジババタイム。
- ◎下山して、「この汚い靴では タクシーに気の毒」と言いながらも水の流れもなく道路上で待っていた。タクシー車内、間もなく下蒜山登山口というあたりで、「風呂はまっすぐ行って左に曲がればあります すぐです」と教えてくれた。車に帰り着き靴を脱いで車を出して風呂屋に向かったが、「本日休業」であった。戻って、道の駅とホテルのあったあたり、「日帰り温泉 と 出ていたよ」ということで向かってみた。風呂に入れたが、蒜山牛乳はなかった。蒜山ICから高速道路に乗った。家には9時半に到着。

播磨国陰陽師智徳法師語 24-19<はりまのくにの おむやうじ ちとくほふし のこと>

◎当時の陰陽師の世界では、賀茂家と安倍家の二流派が権威だった。その埒外にあった播磨の陰陽師の活躍を描いている。田舎にもすごい奴がいるんだぞ、文化文明は中央だけのモノじゃないんだぞ。

◎この話は痛快だ。絶対的に不思議な力を持っている陰陽師が、海賊の極悪人共に資財、人名を奪われ、悲嘆にくれている男の処に現れ、「どれどれ どうなされた よし 助けてあげましょう」と刀や銃を取り出すのではなく、なにやら呪文を唱え、「ちちんぷいぷい」とやらかす。なんと7日後に漂流船が現れる。その船の所に行ってみると、よれよれになった盗賊どもが船の中で倒れている。奪われた資材が帰ってきた、船主に荷が帰ってきた。死んでしまった仲間はどう戻ってこないという設定らしい。

そのあとの老陰陽師の裁きが憎い。「打ち殺してしまえ」という近辺の者を押さえつけ、盗賊どもの身柄を引き取り、「どうだ 恐れ入ったか 二度と罪は犯すでない とっとと失せろ」なんだか昔の時代劇風である、というより、江戸時代からのこのような芝居の展開は、今昔時代からあったのだねえ。

余談だが、「どれどれ どうなされた よし 助けてあげましょう」とどんな奴でもいいからオレの前に現れ、奇跡的な新たな人生が表れるのを期待するのもいい、期待が吉に展開すればもっといい、素晴らしいではないか。

◎今は昔、播磨国〇〇郡に陰陽師のことをする法師がおり、名を智徳と言った。長年この国に住んでこの道を行っていたが、この法師はどうして並み一通りの奴ではなかった。

ある時、〇〇国から多くの荷物を積んで京に上がる船があった。明石浦の沖で海賊が襲い掛かり、船荷をことごとく奪い取り、数人のものを殺して逃げ去った。どうやら船主と下人一人二人だけが海に飛び込んで助かったが、陸に泳ぎ着いて泣いているところに、かの智徳が杖を突いて現れ、「そこで泣いているのはどこの方じゃ」と聞く。

船主が、「国から上がる途中 この沖で昨日海賊と出会い 船の積み荷もみな盗られ人も殺されて どうやら命だけは助かったのです」という。智徳は、

「それはまことにお気の毒 そいつを捕らえてここへ引き寄せてやろう」という。

船主は、ただ口先のことだろうと思ったが、

「そうしていただければ どんなにうれしいことでしょう」と泣く泣く言った。すると智徳は、

「それは昨日の何時のことかね」と聞く。

「これこれの時刻でした」と船主は答えた。

これを聞いた智徳は、船主を伴って小舟に乗り、この沖に漕ぎ出し、そのあたりに船を浮かべ、海の上になにかを書き、それに向かって呪文を唱えてから、引き返して陸に上がり、まるですぐそばにいる者を縛るかのような仕草をして、その道の人を雇い、四、五日監視させていると、船荷を奪い取られてから七日目の〇時ころ、どこからともなく一艘の漂流船が現れた。そこで漕ぎよせてみると、船中に武器を持った大勢の者が乗っており、それがすっかり酔っ払ったようになって、逃げもせず打ち倒れている。なんとあの海賊ではないか。奪い取った荷は失われもせずそのままであったので、船主の言うままにみなこちらの船に運び取り、元の荷主に返してやった。

海賊共はその近辺の者たちが縛り上げようとしたが、智徳が身柄をもらい受け、海賊どもに対して、「今後このような罪を犯してはならぬ 本来なら打ち殺してやるどころだが それも罪になることだからな この国にはこんな老法師いるのだぞ」と言って追い返してしまった。

これはひとえに智徳が陰陽の術を用いて、海賊をうまく引き寄せた結果である。

- ◎「中山から 武田尾まで 歩きますが ご一緒いかが」これを聞いて、「中山寺かな？ 有名な廃線跡？」行きましよう返事はしたが、「場所はどこ？ どこからどこまで？ 山？」内容がわからずに出かけた。そのニアンスで軽いハイキング、4時間ぐらい、行動食もさほど要るまいと高をくくっていたが、いつもの登山靴を履いて行って正解であった。山行時間は7時間、出発時間が9時と遅かったので日暮れが迫り大急ぎで歩いた。食量も多く持って行かなかったがこれも事足りた。水は1.5リットル、これも余った。まずは7時間歩いて大満足である。大阪の里山ぐらいに思っていたが、なかなかハードで楽しめた。
- ◎昨夜どんな道だろうと写真を見ていると、石よじ登りの写真があった。その現場に近づいて、チョイチョイと登って、「なんだこんなもんか」と曲がると急な石の斜面が上まで続く。「え こらあ 大変だ 慎重に登らないと 落ちたら えらいこと 死ぬぞお」と四つん這いになって登っていく。幸い、ここの石は中に石粒が食い込んでいるので滑らない、滑りにくい石なのでなんとか登れた、は一は一ゼーゼーの20分が過ぎると平坦な道。大きく展望が開け大阪平野がまる見え、魚眼レンズのように大阪が広がる。生駒から葛城山系、端っこに淡路島、北摂の高層ビル、大阪市内のビル群、関空のビル、神戸港のキリン郡、伊丹空港が目の前あり、小さく見える飛行機が飛び立っていく。
- ◎中山寺には一、二度行ったと思うが調べると大きな寺のようだ。ハイキングコースはいくつかある。奥の院までも1時間近くかかる。途中会った人は、山本駅から中山駅までぐるり反時計回り5時間ぐらいかかるようだ。今日は山本駅集合と聞いていたがコースも地図もわからないままに駅に着いた。
- ◎阪急宝塚線山本駅から住宅地を抜けるとすぐに山道に入る。最明寺滝というところ、修験者が滝に打たれる場所、そこまで行って引き返し次は崖路、よじ登って11時半に中山てっぺんに到着。早いが弁当にしましょう。冷たい風が吹く、上着を着込み昨夜作ったおにぎり湯をかける焼きそばを喰った。朝もごはん飯、昼もごはん飯、米の飯は腹持ちがいいかもしれない。
- ◎中山寺奥の院に着いた。「あれれ これをまた 頂上まで 引き返して 次は 大嶺山に行く」奥の院というが、中山寺からほぼ1時間ぐらいの登ったところにある分院かな。建物はピカピカに光り、改装されて新築のようだ。引き返しの往復を1時間半ほど使い、中山頂上から北西に向かって歩いた。川と道路を超え小さい字で大嶺山と書かれた登山道を登っていく。このあたりから時間が心配になってきた、「秋の日暮れは つるべ落とし 4時頃には 舗装道路に 出たい」オレは地図もスマホの地図の軌跡もない。
- ◎3時半大嶺山を出発。樹林帯の中、めったに人が来ないのかな。「1時間で林道に出たい もっとかかると嫌だねえ」早足でどンドン下った。あれれという間に麓の雰囲気、登山口に4時ころに着き、「武田尾駅 こっち」と歩いた。武田尾駅ではあちらホームが三田方面、こちらホームは高槻と出ている。「えええ 武田尾とは どこ？」キツネにつままれた雰囲気であったが、そういえばJR茨木駅から“三田行き快速”なんて列車がある。JR宝塚線は三田から笹山方面に行き、反対側は大阪方面、京都線や学研都市線らしい。
- ◎「日暮れまでに 林道に 出たい」と思っていたがすぐに開けた道路、駅まですぐ、余裕で4時15分の高槻行きに乗れた。大阪駅で阪急に乗り換えようと思っていたが、電車内のアナウンスが、「次は宝塚」という。「？」隣に座る高校生に、「このJR宝塚と 阪急宝塚の 駅は近所？」「すぐです」「じゃあ オレ 次で乗り換える」「わたしは 大阪駅までこれで」「それじゃ 今日はありがとう」車内で別れ、宝塚駅で横に見える阪急電車に乗り換え6時前に帰宅した。
- ◎武田尾の廃線跡：オレにとってこれが目玉であった。人に聞くには最高のハイキングコースだとか。JR福知山線の武田尾・生瀬間の線路が複線化に伴い付け替えられ、この8キロ区間が廃線になった。40年前は福知山線の線路として活躍していた通路を、ハイキング道として利用しているようだ。トンネルは真っ暗でヘッドライトで照らして歩いた。トンネル内は砂利石（バラスト）と枕木がそのまま健在、武庫川沿いの溪谷はなかなかいい雰囲気である。今日は日暮れが近いので、近い武田尾駅を選んだが、生瀬まで歩くともっと時間がかかるようだ。

人妻成悪霊除其害陰陽師語 24-20<ひとめ あくりやう となり そのがいのをぞく おむやうじ のこと>

◎離縁された妻が怨み死んで、幽鬼と化し、夫を取り殺そうとしたが、陰陽師の指示に従い命拾いをした。男と女の話、これはそれぞれの場合によって込みいって非常にややこしい。夜の酒場に何度か行ったことがあるが、そこで歌われている歌、歌謡曲、男と女の話がいくつも出てくる。その歌の歌詞がモニターに出てくる。捨てられた女、男から去っていく女、女が振り向いてくれない男、そんな純情恋愛から、遊んだ、転んだ、抱いた、というハードな表現までいくつも見てきた。酒を飲んでほろ酔いの時には、そんな情景にほろりとさせられる。今回の今昔の話、捨てられ怨み呪い殺してやる、これは歌謡曲ではなく、江戸時代の芝居噺によくあるパターンかな。男なら殴る蹴る刃物を出す。女なら毒を盛る呪詛するかな。陰陽師の大先生の術もさることながら、女の死体が時を経て見る影もないさまや、その死骸の髪の毛を掴んで離すな、なんてことは想像するだけでも気持ちが悪い。話の中に、その悪臭、腐っていく汚さ、それが表現されてないのが救いだ。むろん今昔が書かれた当時、街中に人の死骸など目に見える機会が多かったと想像する。オレも今までで、交通事故で死んでいく中学仲間の学生服姿、雪の中で凍死している若者のお六（南無阿弥陀仏の6文字から）姿、河の中から引き揚げられた土左衛門氏（土左衛門という名の腹が太った力士：水死体も腹が膨れる）の3人の遺体を見たことがある。

◎今は昔、〇〇という者がいたが、長年連れ添った妻を離別した。妻はこれを深く恨み嘆き悲しんだが、その思いのため病となり数か月患った後思い死にをしてしまった。

この女は父母もなく身寄りもなかったので、亡骸を始末して葬ることもせず、そのまま家の中に放ってあったが、髪も抜け落ちず元のように付いていた。また、その骨もつながったままでばらばらになってはいなかった。隣の人は戸の隙間からこれをのぞき見していいようもなく恐れおののいていた。また、その家の中に常にまっさおに光るものがあり、いつも家鳴りなどしていたので、隣の人は怖がって逃げ惑った。

さて、その夫がこの話を聞き半ば死にそうな心地がして、「どうしたらこの死霊の祟りを免れるだろうか オレを恨んで思い死にして死んだ女だから オレはきっとこの女に取り殺されるに違いない」とおののき畏れ、〇〇という陰陽師のところに行き、この話をして、祟りを免れる方法を聞いたところ、陰陽師は、「これは実に免れたいところのものです だが これほどおっしゃるからには なんとか方法を考えてみましょう しかし「そのためには非常に恐ろしいことをすることになる その覚悟をして我慢をなさい」

日が沈むころ、陰陽師はかの死人のいる家にこの男を引き連れて出かけて行った。男は人から聞いてさえ、髪の毛が太くなるほど恐ろしいのに、ましてこの家に出かけて行くなど、実に恐ろしく堪えがたかったが、ひとえに陰陽師を信頼して出かけて行った。

行ってみると、本当に死人の髪の毛は抜け落ちず、骨はつながったまま横たわっている。その背中に、男を馬にまたがるように乗せた。こうして、その死人の髪をしっかりと握らせ、「絶対に離してはなりませんぞ」と注意して、呪文を唱え祈祷して、「私がここに来るまでこのままでいなさい 必ず恐ろしいことが起こりますよ それをじっと我慢していなされ」と言いおいて陰陽師は出て行った。男は仕方なく、生きた気もせず死人にまたがったまま髪を掴んでいた。

やがて夜になった。真夜中にもなったと思うころ、その死人が、「ああ重たい」というと同時に立ち上がり、「よし あいつを探してこよう」と言って家の外に走り出た。どこともわからず、はるか遠くに行く。だが、陰陽師の教えに従って、髪の毛を掴んでいたのもので、そのうち引き返し、元の家に入って前のように横たわった。男にすれば恐ろしいなんてものではない。無我夢中だったが、じっとこらえて髪の毛を放さず、背中にまたがっているうち、やがて鶏が鳴くと、死人は声も立てず静かになった。<中略>陰陽師がやって来て、「もうよろしい 帰りましょう もう恐れるひつようはありません」男はその後長命を保った。

◎主観・客観

おっさん連の会話

しゅかんときゃっかんが 違うのだ という 認識

イヤイヤ 同じだという 違和感

◎言葉を 紡ぐ 織りなす

絶対的な 真理、正解、そうはいうけれど

そうじゃなくて ただ 流れているだけ 言葉が 流れるだけで いい

◎オレの感受性は絶対だ なんて言うけれど

その感受性 今日も明日も 揺れ動いている

ブレブレに 右に左に 揺れ動いている

絶対なんて そんなもん あるものか 吹っとんでいけえ

◎色が天から降ってくる 色が降り注いでくる

うまい具合に うまい処に ぴったり

注いで くれりゃ

絵の完成である

◎心の目 なんていうけれど

真っ暗じゃ 絵は見えない

明るくないと 絵は見えない

◎いつもいうけれど

説明してはいけない

化粧してはいけない

素(す)のままがいい

◎なんでもよく気付く これもよし

前だけしか見ない 何も気付かない これもまたよし

◎草や木の葉は 絵の具の緑色と違って

百も二百も 違う緑を見せてくれる

そんな百も二百もの緑を見ていると とろけるね

◎鳥がなぜ飛べるのか 知らないね

鳥はなぜ飛ぶのか 知らないね

鳥の目はすごいらしい

なにが見えるのか どう見えるのか

色は何色見えるのだろう

◎キヌちゃんが、源氏物語を読んでいるという、瀬戸内寂聴の現代語訳、全10巻を購入して今3巻目だそう
だ。「面白いが、漢字が読めない、ふりがなは初出の時はふってあるがそれから後がふっていないので、また
前に戻って調べる。それと人間関係がわからない。系図があるのでそれをいつも確かめなければわからな
い。名前が決まっていなくて同じ人物が違う名前が出てくる。特に女性には名前がなくて関係する男の地位
に絡めた名前で、混乱する。男も呼び方が色々。こんなことで、時間をかけながら少しずつ読んでいま
すが、暇なときには楽しい読み物です」

メールの終わりに、口語体で語っている。「昔の地位の高い貴族は、夜這いして、今で言う強姦に近いことを
してもお咎めがなかったような。それはないやろ、と思う反面、羨ましくもある。現在なら逮捕され社会的
に抹殺ですね」

◎オレは、源氏物語を読もうとは思わなかった。いまだにそのあらすじさえ知らない。もちろん大河ドラマは
見ない。日本の一番すごい物語だと思うけれど、一番すごいのがいやなのか、宮廷文化がいやなのか、十二
単がいやなのか、食指が動かなかった。図書館の古典の本の中でも、源氏物語に関する本が一番多かったの
は事実だ。友人で元画商の樋口さんも、わが娘も、源氏物語に挑戦しているとか。NHKの大河ドラマが源氏物
語をやっているの、大はやりかもしれない。

◎オレはこの5年10年、“古事記”“今昔物語集”にかかりきり、ボケた頭でこれ以上読めない欲張れない。古
事記は最初、市の図書館で何冊か本を借りちよとずつ読んだが、難解そのものだった。それがちよとずつ
わかるようになり自分なりに楽しめるようになった。と言っても楽しむ程度でほとんどわかっていない。

「古事記は 神話だ 神話として 読んでいるよ」ぐらいにしか話せない。

今昔物語集：これも、市の図書館で何冊か本を借りちよとずつ読んだ。「今昔物語集の中には面白い説話が
いくつも載っているよ」というような初心者向けの解説の載った本を読むうちに、少し読めるようになっ
た。この二つの本、古事記は漢字ばかりで書かれている。今昔物語集は漢字と仮名と半々で書かれているの
で、原文はなかなか読みこなせない。高校生のころに“古典”という授業で習った、「こらあ つまらん学問
だ」なんて思っていたが、50年以上経った今でもいくつかのフレーズや、先生の言葉の一端は覚えている。

◎この二つの本、歌がいくつも出てくる。最初は、「歌なんて」と飛ばして読んでいたが、「歌が大事だ 歌を
味わわなきゃ」と思うようになり、歌の部分も読むようになったが、解説が無いと同じ日本語だろうけど、
単語も、動詞も、ピンとこないものがある。「これが 日本語か」と聞いたこともない音（おん）に戸惑いな
がら、解説を読むと、「これが あれに 発展 したのか」とわかったようなわからないような。

◎そこでオレのかってな解釈だけれど、縄文時代、1万7千年前から縄文人は人なので話していたと思う。
こんなことを言うと、「我らは 猿じゃ ねえぞ」と縄文さまに怒られるかもしれないが、家族がいて仲間が
いて話していたはず。そんな縄文人の言葉は、今の日本語の元の本拠地だと思う。弥生時代になるとペラペラ
日本語を話し、歌い、喧嘩をしていたはず。ただ残念なことに文字がない、文字がないということは後世に
伝えるのも、遠方に伝えるのもできない。口承や伝承でしか伝達できない。

口承や伝承でしか伝達できないということは、デメリットだけど、ここに歌が生まれる、叫びが生まれる、
芝居が生まれる、というメリットがあるのでは。

古事記の三浦先生が何度も、「古事記は口承文学」と言っている。何度も何度も同じことを語り歌って行く
と、時代や場所によって変化していきだろけど、語りや歌が専門的、上手くなって行って、華やかで面白
いものになっていくとオレは思う。